

ジェイコブ・シフとリスクの技術: 序章

1904年、日本は一見してより強大な対戦相手であるロシア帝国と戦争を開始しました。日本の勝利において重要な要素の一つは、アメリカのユダヤ人銀行家でドイツ生まれのジェイコブ・ヘンリー・シフ（1847-1920）によって提供された金融支援でした。シフは日露戦争の文脈において、ロシア政府のユダヤ人に対する扱いへの敵意から主に動機づけられていたと説明されています。これは確かに真実ですが、ここで示されるケースは、シフの動機は多様であり、彼の心の中では一体化していたというものです。また、著名な銀行家として彼の慎重さはリスクの軽減を確実にするためのものでした。さらに、20世紀初頭の日本に対するシフの異常なほど肯定的な態度は、彼の行動を支える上で少なくとも同等に重要であり、反ユダヤ的なロシアへの敵意よりもさらに大きな対抗力だった可能性があります。

1904年よりはるか以前から、シフは人々が自分たちで自助するのを助けることに焦点を当てた慈善活動のパターンを確立していました。ロシアに対する日本の戦争努力を支援したことは、この実践と傾向に一致しています。1904年までにシフは日本という国に個人的に精通しており、その国民の勤勉さと忠誠心に深く感銘を受けていました。重要なのは、シフが日本の貸付を引き受ける前にその評価を厳格に行ったことです。彼の仲間たちはそれをあまりにも投機的と考えていましたが、これは彼を同世代の大多数と区別しました。彼が日本の戦争努力を資金提供したのは、リスク評価と予測されるリターンに基づいた健全な経済原則に基づいていたことは疑いありません。シフがロシアのポグロムに対して、かなりの財力を持つユダヤ人としての強い対応を求められると感じたかもしれませんが、彼が日本に対して取った行動の動機は、主に銀行家としての優れた能力と一致していました。

シフの日本における支援役割は、いくつかの点で前例のないものでしたが、これは歴史記述に反映されていません。シフは保守的な投資家であり、常に自身の取引が慎重であることを確認するために多大な努力を払っていましたが、日本を資金提供してロシアとの対立を支えるという行動は、彼の同時代人のほとんどがリスクと見なしていたことに強く取り組みました。彼がこれを行うことをいとわなかった主な理由の一つは、日本に対する非常に好意的な認識と、それに対抗するロシアに対する激しい否定的な認識でした。シフの健全なビジネス取引に対する評判、アメリカおよび世界の銀行業界における巨人としての地位、そして彼の個人財産はすべて危機に瀕していました。しかし、彼は自身の立場が保存されるか、あるいは日露戦争の結果として向上すると確信しており、その鋭く対照的な見解からリスクが軽減されると見ていました。シフの見解では、ロシアのような野蛮な国が勝利することを許すことは、世界の文明の進歩に対する脅威であると考えていました。ロシアのユダヤ人に対する扱いは人類への汚点であ

り、ロシアのアジアへの進行を阻止するだけでなく、皇帝の権力を後退させる必要がありました。しかし、日本の地位は単なる後付けや予期しない結果ではありませんでした。

この重要な紛争および日本の発展の形成段階におけるシフの重要な役割を考慮することは重要です。シフは銀行業界の仲間よりも伝統的に敬虔なユダヤ人であり、彼の仲間の中で最も高い程度で観察されていました。また、シフは世界中のユダヤ人との熱心な親和性を維持していましたが、時には冷淡と見なされることもありました。しかし、同様の忠誠心と連帯感は、日本国家およびその国民に対する態度にも現れていました。これまで学者の注意を引かなかったのは、シフがロシアへの敵意と同等以上に日本への共感を持っていたことです。シフは日本人を支援することに勇気を持ち、信頼票と実質的な経済的刺激を提供する準備ができていました。他の人々がリスクを見るところで、シフは機会と複数のレベルで正しいことを行う方法を見ていました。

シフは銀行業界の他の人々と同様の情報にアクセスしていたので、彼がなぜ彼の仲間と異なる行動を取ったのか明らかです。確かに銀行家たちは機会を求めており、日本の資金調達の必要性をほとんど全員が認識していました。シフが日本に関してこれほど異なる行動を取るように影響を与えたのは何だったのか、そして彼がその決定が愚行でないことをどのように保証したのか。確かに、表面上はほとんどのドイツ系ユダヤ人銀行家は、シフよりもはるかに高い程度でアメリカ、英国、または中央ヨーロッパの世俗文化に同化していました。シフの比較的根深いユダヤ人アイデンティティと、ロシアの同宗教者を守るという欲求が、彼の決定を推進する上で最も重要であったのか、それともリスクを軽減し利益を生み出すことに関心を持つ銀行家としての彼が最も重要であったのか。日本に対する彼の評価と野心が、その国への貸付を資金提供する決定にどのように寄与したのか。

シフは銀行界の他の人々と同様の情報にアクセスしていたので、彼がなぜ彼の仲間と異なる行動を取ったのか明らかです。確かに銀行家たちは機会を求めており、日本の資金調達の必要性をほとんど全員が認識していました。シフが日本に関してこれほど異なる行動を取るように影響を与えたのは何だったのか、そして彼がその決定が愚行でないことをどのように保証したのか。確かに、表面上はほとんどのドイツ系ユダヤ人銀行家は、シフよりもはるかに高い程度でアメリカ、英国、または中央ヨーロッパの世俗文化に同化していました。シフの比較的根深いユダヤ人アイデンティティと、ロシアの同宗教者を守るという欲求が、彼の決定を推進する上で最も重要であったのか、それともリスクを軽減し利益を生み出すことに関心を持つ銀行家としての彼が最も重要であったのか。日本に対する彼の評価と野心が、その国への貸付を資金提供する決定にどのように寄与したのか。

ジェイコブ・ヘンリー・シフは1847年1月10日にドイツのフランクフルトで、モーゼス・シフ（1810-1873）とクララ（旧姓ニーダーホフハイム、1817-1877）の息子として生まれました。彼の父親は長い系譜を持つ著名なラビの家系から来ており、彼の直接の血統は1370年代までさかのぼることができ、フランクフルトのユダヤ人家族の中でおそらく最も古いものの一つです。彼の男性の先祖の三分の一はラビ、ユダヤ人の宗教裁判官、またはユダヤ人コミュニティの平信徒指導者であったと言われています。彼の最も有名な先祖の一人は、タルムード学者として知られるメア・ベン・ジェイコブ・シフ（1608-1644）であり、その著作は今日でもタルムードのほとんどの版で引用されています。また、デイビッド・テヴェレ・シフ（1722-1791）は1765年から亡くなるまでイギリスの首席ラビを務めました。ジェイコブ・シフの正統派の育成への忠誠は、彼の同世代の多くの同僚とは異なり、彼の世界観と行動を生涯にわたって特徴づけました。

1865年、18歳のとき、彼はアメリカ南北戦争が終わったばかりのアメリカ合衆国に移住しました。アメリカでは、彼はもしヨーロッパの階級社会にとどまっていたならば彼の人生を定義していたであろう文化的小よび政治的制約からの遺伝的な絆を解き放つ機会を見出しました。彼の血統はロスチャイルド家やシュパイア家の大銀行家の家系よりもさらに古くまでさかのぼることができましたが、彼の直系の家族は裕福にはなりませんが、これらの有名な家族企業ほどの財務的成功を収めていませんでした。彼は生まれた運命と継承された地位から解放されるために、アメリカに一人で自主的に移住し、限られた資源で到着しました。テレサ・コリンズが指摘するように、彼はマークス・ゴールドマン（1821-1904）のように最初は行商をしていた初期のドイツ系ユダヤ人銀行家の創業者とは異なり、またロスチャイルド家を代表して到着したオーガスト・ベルモント（1813-1890）のような大ヨーロッパの銀行家の後援を受けていませんでした。

シフは既存のユダヤ人銀行ネットワークから自分自身を解放しようとする一方で、ヨーロッパの偉大なユダヤ人銀行家との家族的なつながりから得られる影響力も認識していました。彼は逃れたネットワークを利用したいと考えており、それを超えてもコミュニティの一員であり続けました。クーン・ローブでキャリアを築き、創設者のソロモン・ローブ（1828-1903）の娘テレーズ（1854-1933）と1875年に結婚し、4年間にわたりアメリカの最も強力な金融機関の一つに成長させ、そのパートナー全員が創業者の子孫と結婚しているか親戚であることを確認しました。

シフのアメリカ到着のタイミングは幸運でした。彼は1873年の恐慌が多くの鉄道会社を破産させる直前に銀行業界でキャリアをスタートさせ、市場の修正の機会を利用してクーン・ローブを通じて鉄道金融の最も強力な人物の一人になりました。シフの鉄道金融への最も有名な貢献は、おそらくE.H.ハリマン（1848-1909）のユニオン・パシフィック鉄道の再編成と建設の資金

調達と、J.P.モルガン（1837-1913）との有名な競争におけるペンシルバニア鉄道の拡張です。彼の個人資産は約5000万ドルと言われており、J.P.モルガンの6830万ドルと美術コレクションだけで5000万ドルと言われている資産に次ぐものでした。しかし、どちらの人物も産業家のアンドリュー・カーネギー（1835-1919）、ジョン・D・ロックフェラー（1839-1937）、ヘンリー・フォード（1863-1947）、E.H.ハリマンの財産には及びませんが、銀行家の中ではリーダー的存在でした。

南北戦争後のアメリカで生じた機会を活用し、シフは自らの業界のトップに駆け上がる理由を正当化するようなニッチを作り上げました。彼は国のゴリアテたちの中で他のダビデを探し求めました。ニューイングランドのエリートの中で「個人的に所有されていない」鉄道資産に焦点を当てることで、彼はこれを行いました。コリンズはシフを、独立して行動し考えることを促されたアンダードッグとして洞察力をもって認識し、彼がヨーロッパでモルガン、シュパイアーズ、またはコリンズが言及する「他の既存の家系」とすでに連携していない同様に独立した銀行家との関係を築いたことを指摘しています。これらの関係の中で最も重要なものの一つが、アーネスト・カッセル（1852-1921）との同盟でした。カッセルとの関係は、日本との取引において重要な要素であることがわかります。

日露戦争の時点で、シフの力と影響力は主に鉄道産業に集中しており、クーン・ローブは主要な金融機関となっていました。これはヨーロッパでロスチャイルド家が持っていた驚異的な力とは対照的でした。ロスチャイルド家のビジネスは、何世紀にもわたって大部分が政治的に動機付けられて進化してきました。戦争中でも平和な時でも、国家の運命はロスチャイルド家がどのように力を行使するかによって依存していました。新しく発展しているアメリカでは、ビジネスにおける国家の直接的な政治干渉ははるかに少なく、アメリカ経済の爆発的な成長に助けられた独立して行動する個人にとってははるかに多くの機会がありました。

ロスチャイルド家は、効果のない代理人であるオーガスト・ベルモントに依存していたため、アメリカの鉄道ブームを完全に活用することができませんでした。彼らはまた、アメリカ政府が金本位制を維持することへのコミットメントに懐疑的であり、アメリカ市場の安定性について懸念していました。これらの要因が有効であれば、ロスチャイルド家の金鉱業への利益を強化することにはなりません。シフが率いるクーン・ローブの日本の債券への進出は、クーン・ローブにとってもアメリカの金融市場にとっても決定的なものであり、確かに両者にとって力強いものでした。シフのアプローチは、ニール・ファーガソンが指摘するように「政府の政策に疑問を投げかけるのはいつも微妙な問題である」と「かなり率直に」述べたロスチャイルド家の断固たる政治的影響力とは対照的でした。政府の政策に疑問を投げかけることが彼らの運営方法の基本でした。

シフは日本をアンダードッグとして支持しました。日本人は品位があり勤勉であり、彼の支援に値するものでした。日露戦争に先立つ数年間、日本は何世紀にもわたる孤立から抜け出し、植民地列強との過酷な貿易協定を克服し、イギリスとの軍事同盟を結び、中国との小規模な戦争を戦いました。これは、主に西洋諸国によって支配されていた弱い抑圧された国でした。日本がその裏庭でロシアと領土争いを行っている中で、日本は歴史の重要な分岐点に立っていました。この時点で、どの非西洋諸国も成功裏に工業化を成し遂げたことはなく、20世紀中盤までそのようなことはありませんでした。国々は主に三つの主要なカテゴリーに分類されました：西洋および工業化された国、植民地、および非植民地。したがって、日本は西洋でもなく植民地でもなかったため、他の非植民地国とは大きく異なる軌道を描いていました。シフが提供した戦争貸付がなければ、日本は外国の貸し手の間での信頼性を失い、経済的崩壊の可能性が高かったでしょう。日本にとって、ロシアとの戦争は存在に関わるものでした。敗北すれば、経済的に植民地化され、少なくとも近い将来、世界舞台で重要な影響力を持つ希望を失う脅威に直面していました。

シフは1872年に初めて日本を紹介されました。これは、1880年代初頭に始まったポグロムの波がロシアの反ユダヤ主義を大きく高める10年前のことでした。シフが最初に日本について話した相手の一人は、ジェームズ・H・ウィルソン将軍（1827-1925）であり、シフはまだバッジ・シフ&カンパニーを経営していた時期にヨーロッパで鉄道債の資金を調達しました。これは、シフがアメリカに到着してすぐに共同設立し、クーン・ローブに入る前の会社です。ウィルソンがシフに語った日本の経験は、名誉ある独立した人々であり、深い文化的歴史を持ち、外国の影響を歓迎する受容的な国であるという詳細なものでした。シフは、日本が外部の影響を排除するのではなく、他の文化や人々からの最高のものを受け入れつつ、自身の文化的な完全性を損なわないという考えに感銘を受けました。彼は、日本の世界コミュニティへの統合の願望を認め、報いると同時に、日本の成長と発展を支援することで利益を得たいと考えていました。

同時に、シフがウィルソンから日本の文化について話を聞いていたとき、彼はまた日本に貸し出す可能性についても学んでいました。また、1872年に彼はアメリカ合衆国駐日公使C. E. デ・ロング（1876年没）によって吉田清成（1845-1891）に紹介されました。吉田は日本政府によって貸付委員に任命され、400万ポンドの貸付をニューヨークまたはロンドン市場に求めていました。シフは7%の貸付について吉田と議論し、彼をフランクフルトの「本社」に紹介しました。

これらの議論から最終的には何も生まれませんでした。シフが日本での機会を模索することにすぐに引き付けられたことは明らかです。彼は日本の全鉄道拡張を資金提供する可能性を雄大に見越していました。彼は、アメリカで鉄道を資金提供し始めたときと同様に、日本にも経済的な機会を見ていました。彼が初めて日本を投資先として認識してから30年以上が経過し、

シフはアメリカから日本への機会をうまく見つけ出しましたが、ロスチャイルド家はその全世界的な力にもかかわらず、完全に見逃していました。

ロスチャイルド家は、派手で政治的に気を取られていたオーガスト・ベルモントに代表権を与えたため、アメリカでの機会を活用することに失敗しました。ベルモントは、数世紀の孤立の後に日本を開国したマシュー・C・ペリー（1794-1858）の娘と結婚し、「コモドアを執事として使った」ことで、ロスチャイルド家に日本を引き渡すことに失敗しました。シフは、ニューイングランドのエリートが鉄道で逃した機会や、ロスチャイルド家がアメリカと日本で逃した機会を利用しました。

シフの鉄道金融における力と影響力が増すにつれて、それに並行して彼の慈善事業の寛大さも成長しました。彼は生涯で1億ドル以上を寄付したと言われています。彼は、最高の慈善行為は受け取り手が自分を支える尊厳を得る手段を提供することであり、寄付者として、資金が適切に分配されることを確認する責任を委任しないことが最重要であると考えていました。彼は寄付先の機関の運営に強い影響力を行使しました。

1880年代初頭にロシアのポグロムがエスカレートした後、シフの慈善事業と政治的関心は、ロシアの同宗教者の窮状を緩和することに焦点を当て、彼らのアメリカへの移住が激化する中で、この関心は移民問題に向けられました。この点で彼の役割を特に際立たせた二つのことがあります。第一に、彼の移民に関する仕事は、日本の資金調達が政治的およびビジネス的動機を伴っていたのに対し、ポグロムの野蛮さの結果としてのみ行われたということです。第二に、彼がロシアのユダヤ人移民の苦しみを緩和するための取り組みを主導していた間、彼は大部分で広範なユダヤ人コミュニティの言葉と行動によって支持されていたのに対し、日本への資金提供の決定は、彼が独立して個人的に行ったものでした。

シフは、原則としてアメリカへの大量移民を早期に支持し、ロシアのユダヤ人が到着した後も積極的に支援していたことで、コミュニティの中で目立っていました。この立場は当初、彼の同僚とは対照的であり、彼を広範なユダヤ人コミュニティで高く評価される人気のある人物にしました。ポグロムによる苦しみを緩和する彼の仕事への公的な支持が増える一方で、彼の日本に関する政策についての明確なユダヤ人コミュニティの委任はありませんでした。

シフと日本に関する歴史的な物語や解釈の主要なテーマは、彼が「ポグロムのために」日本を資金提供したというものです。確かにシフはポグロムの被害者をあらゆる方法で救済したいと考えていました。彼は、ロシアにまだいる被害者に一貫して直接的な財政援助を提供することで、「ポグロム基金」を作り出してしまう可能性がある問題に敏感でした。また重要なのは、

日本を救うことがユダヤ人の議題にはなっていなかったということです。シフは日本を支援することを選ぶ際、ユダヤ人コミュニティとはほとんど独立して行動しました。彼は内向きだけでなく外向きにも目を向けていました。彼にはコミュニティの支持も反対もありませんでした。シフは全く自発的に行動し、ドイツからアメリカへの移住を促した開拓精神を反映していました。ユダヤ人コミュニティが市民権や移民問題のような問題を公然と議論している間に、日本を積極的に支援するという思想的立場はシフによって開始され、彼を際立たせました。

1904年までのシフの人生を通じて、彼は意識的にビジネスの生活を宗教的および慈善的な生活から切り離し、両者が重なることを決して許しませんでした。彼の慈善的な関心は同時にビジネスの関心事ではありませんでした。彼は慈善事業から利益を得ることはなく、彼のビジネス活動は彼の慈善活動や宗教的信念と実践から分離されていました。1904年にそれらが交差し、シフはロシアに対する日本の戦争努力の資金調達を引き起こしました。これは、彼の人生の中で彼がユダヤ人の慈善的関心とビジネスの関心を積極的かつ直接的に統合した象徴的な出来事でした。これは彼の人生の基本的な情熱の二つが焦点を合わせ、彼の人生を決定づける行動を導くものでした。日本において、彼は金融的な報酬を提供し、ロシアに対するもう一つの戦線を開くだけでなく、ユダヤ人およびより広範な人権にも関わる国を見ました。それは、自己支援の手段を提供することが最高の援助形式であるという彼の宗教的に動機付けられた信念の例として機能しました。したがって、彼は日本が独立して戦争に勝利し、専制的なロシアの抑圧者に一人に対抗するための経済的な資金を提供しました。

1904年の日本へのシフの支援は、彼の宗教的アイデンティティが彼のビジネスの関心と融合した彼の人生の中でまれな事例の一つでしたが、彼のその時の行動は経済的論理を欠いていたわけではありません。シフに焦点を当てた作品では、彼の金融リスクの扱いについてあまり大きな注意が払われていません。しかし、ビジネスの観点から見ると、彼の決定において彼は最大限にリスクを軽減しました。私のアプローチの主要な貢献の一つは、これらの行動の歴史的背景と、シフがすべての面でどれほど慎重であったかを明らかにすることです。これは、彼の日本の資金調達におけるビジネス活動を概説するか、完全に無視する傾向がある歴史記述にとって重要な追加です。

シフは非常に慎重にリスクを評価し、日本を推薦する多くの要因を見出しました。彼は日本が金本位制を採用していることを理解していました。彼は、日清戦争（1894-1895）から多額の賠償金を受け取っており、これがヨーロッパの銀行によって完全に資金提供されていたことを知っていました。日本は西洋の特性によって安心して認識される洗練された銀行システムを持ち、ロンドン市場と良好に接続されていました。シフは、香港上海銀行（HSBC）、パー銀行、ベアリング兄弟がすべて日本の債券を引き受けたが、独特のヨーロッパの政治的陰謀によって貸

付を進めることができなかつたのを見ました。さらに、ベアリング兄弟は日本に貸付を行った直接の経験を持ち、その人々の勤勉さと誠実さについての第一印象を賞賛していました。

シフは慎重かつ道徳的な誠実さをもって行動していると強く信じていただけでなく、ビジネスリスクがほとんどないと計算していました。この点での彼の信念が、彼の行動を同業の銀行家たちから最も際立たせるものでした。クーン・ローブのパートナーの一人であるポール・ウォーバーク（1868-1932）は、戦争前から日本の大義を支持していたことに同意していました。しかし、ウォーバークは、他の銀行が日本政府が望む規模での引き受けを開始しなかった理由は、日本が勝利するかどうかについての懐疑的な見方があまりにも強かったためだと考えていました。「最終的には」とウォーバークは言いましたが、「日本は敵の重圧に圧倒される可能性が高い」と考えていました。彼はシフが

日本の貸付発行に参加する機会を歓迎したと考えていましたが、日本の貸付がここアメリカで成功するかどうかは非常に疑わしいものでした。当時、外国の貸付はアメリカの投資家にとって非常に珍しいものであり、戦争の期間と結果に関する疑念が加わって、この事業が金銭的および名声の両面でかなりのリスクを伴うことは明らかでした。

シフ自身も、外国の債券に投資することが危険な事業である可能性があることを懸念してはいわけではありませんでした。1904年6月、彼はスターン・ブラザーズがヨーロッパで発行していた小規模なリオデジャネイロの債券発行をニューヨークで引き受けることに同意しました。シフは、「ここで債券がうまくいくかどうかを事前に知ることは非常に難しい」と述べ、ニューヨークでの発行は日本の発行とは対照的に、アメリカ市場にとって完全に実験的なものであると感じていました。彼は、リオがアメリカ市場にとって遠くて未知のものであると感じていました。リオでの発行が成功すれば、それは「完全に我々の名前の力によるものだ」と考えており、特定の債券についてはその事実で安心感を見出すことはありませんでした。

日本の発行に対する彼の見方は非常に異なっていました。彼が売却した日本の債券に対する需要が彼と他の銀行家の期待を超えたのは、シフの政治的目標に対する予期しない支持からではありませんでした。むしろ、買い手は金融リターンの可能性がリスクを上回ると信じていました。価格設定は他の投資家が利用できる他の選択肢に比べて非常に競争力がありました。シフは、クーン・ローブの評判を日本の発行に持ち込み、市場の信頼を高めることに何のためらいもありませんでした。市場は、日本の立場が正しいと信じ、ロシアの立場が間違っていると信じ、潜在的な金融リターンのプロファイルが堅実であり、クーン・ローブが引き受けているため、リスクが軽減されていると信じて、債券を購入しました。市場にとって、背景は地政学および経済的なものでした。ロシアのユダヤ人に対する扱いを罰することは、投資家の計算には全く入っていませんでした。

リスクを軽減する努力の他に、シフは日本が必要としているときに貸付を行うことで、感謝する国の信頼と忠誠を得て、戦後の金融譲歩を勝ち取ることができると信じていました。この実際の経済的動機は、日本が戦争で直面している不正に対する彼の感情によって強化されました。彼の目には、ロシアは自国民を内部で圧迫し、特に彼のユダヤ人同宗教者に対して同じいじめの戦術を採用していると見なされ、表面的に弱い日本に対して同じいじめの戦術を採用しているように見えました。後になって初めて、日本がその支配下の国々や人々に対して、シフがロシアで批判していたのと同じ残虐行為を行う意思があることが明らかになりました。

ピーター・バウアーとバジル・ヤメイは、開発途上国の進歩に対する個々の外国企業家の経済的介入が、過度に強い影響を与える可能性があるかと主張しています。シフの日本の進展における役割は、この動態の一例です。シフは、日本の戦争資金を結晶化する重要な要素を提供することで、日本が第二次世界大戦前に独自に工業化した唯一の非西洋国としての独自の地位を得るための道を開きました。

シフの行動は、軍事力を使用せずにコントロールを奪うアメリカの帝国主義的拡大主義の先駆けでした。それは、アメリカのドル外交と世界の金融市場における優位性への道筋の起源に繋がりました。西洋諸国は直接の植民地モデルからシフトしました。代わりに、これらの国々が工業化を開始するとき、彼らの軍事力を使用して外国の生産手段を支配することを始めました。アメリカは、金本位制に支えられたドルブロックを創造するという外交政策の夜明けにありました。シフはこれらの傾向と調和しながら、独自に戦争貸付を通じて日本に経済的影響を与える機会を見出しました。ロシアは、地域の貿易を支配し、他国を支配するために軍事力を使用しようとしていました。シフは、日本の潜在的な経済力を最も価値のある資源として見なし、それを資金調達することで自らの潜在的な経済力を見出しました。シフにとって、金融契約のペンは、ロシアの軍隊が日本の未来を支配するために使う剣に対するアメリカの対抗手段でした。

テレサ・コリンズ、オットー・カーン（1867–1934）の最新の伝記作家は、シフの一部ではあるが興味深い肖像を提供し、カーンとその時代を理解するにはシフを考慮せずには不可能であると認めています。実際、ジェイコブ・シフは19世紀後半から20世紀初頭にかけてのアメリカの歴史、現代ユダヤ人の歴史、日本の歴史、国際ビジネスと金融の歴史において非常に重要な人物でした。彼の活動を主に「親ユダヤ的で反ロシア的」とするキャラクター化は、歴史記述の中で繰り返されるフレーズですが、その表面をかすめるに過ぎません。

シフがこれらの文脈で認識され、理解されることは重要です。特に日本の劇的な台頭を理解するためにはそうです。一方で、シフは有名で調査されたドイツ系およびアメリカ・ドイツ系ユダヤ人の銀行エリートのグループの一部でしたが、重要な点で彼は仲間から逸脱し、彼が追求した独自の道は世界中に深い影響を与えました。しかし、ホロコースト以降、ユダヤ人とお金の関係を探ることに対する学者のためらい、そしておそらくもっと重要なことに、日本が強烈に国家主義的で攻撃的になり、アメリカの大敵でありナチスドイツの同盟国となったため、ほとんどの歴史家はシフと日本の関係を精査することを考えもしませんでした。実際、国民国家の発展におけるユダヤ人銀行家の役割を調査する歴史家の例はほとんどありません。アンソニー・レンティンは、サー・エドガー・スパイヤー（1862-1932）の影響と最終的な没落について書いていますが、レンティンは反ユダヤ主義に言及しながらも、主にスパイヤーのドイツ系の遺産に焦点を当てています。ニール・ファーガソンとロン・チャーナウは、それぞれロスチャイルド家とウォーバーク家の政治的影響について話していますが、銀行家のユダヤ人アイデンティティに対する意識とは切り離して話しています。デレク・ペンスラーはこれらのテーマに触れていますが、フリッツ・スターンだけがユダヤ人銀行家（ゲルソン・フォン・ブライヒレーダー）と彼の国ドイツとの関係を、ブライヒレーダーが自分自身をどのように見ていたか、そして世俗世界が彼をどのように認識していたかという文脈で深く調査しています。

シフはまた、反ユダヤ主義者や陰謀論者の対象にもなっています。デレク・ペンスラーは、ユダヤ人とお金について話すことが、このようなステレオタイプのイメージを引き起こすため、人々がそれについて話すのを好まないという考えについて議論しています。この分野でシフについて書かれていることにはほとんど根拠がありませんが、この種の非難がなぜ学者たちが彼についてコメントすることをためらうのかを理解する手助けとなるかもしれません。

この本は特定の歴史的瞬間を明らかにすることを目指しています。それは、日本が世界舞台に台頭するのを助けた利害の一致を照らし出すことです。また、シフがこの壮大な努力をどのように実行したかの実際の側面を詳細に検討することも目的としています。

これは従来の伝記ではありません。ポグロムがシフにとって緊急の関心事であったという考えを否定するものではありません。むしろ、日露戦争中の日本の資金調達におけるシフの背景を検討するものです。これまでこのテーマについて書かれた学者たちは、シフの役割に関する貴重な洞察のパッチワークを提供しており、その中にはシフの役割に関する最近の革新的な解釈も含まれています。他の歴史家たちは、私が使用したのと同じアーカイブ資料の一部を使用しています。リチャード・スメサーストと鈴木敏夫は、銀行アーカイブの利用において最も包括的です。彼らもまた、ベアリング銀行、HSBC、パー銀行のアーカイブにアクセスしています。しかし、彼らのアプローチは異なります。私がシフの役割と動機に焦点を当てる一方で、スメ

サーストは戦争中の日本の金融委員である高橋是清（1854-1936）の貢献に焦点を当てています。鈴木はロンドン市場での日本の貸付発行の動態を分析しています。

この本は、これまでにコメントした歴史家の仕事を基にして、分散した洞察を新たに得た資料データと組み合わせ、シフの役割の解釈を提供する異なるアプローチを取っています。それは、シフが同時に慎重であり投機的であったことを明らかにします。シフは当時、主に内部成長のダイナミクスに集中していたアメリカ市場にトランスナショナルな視点をもたらしました。これは、ほとんどの同時代人と比べて特にそうです。彼は外国文化に興味を持つだけでなく、その歴史を変える手助けをした人物でした。